

平成31年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No.1)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(1) 3年間を見通した指導計画のもと、主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業実践、家庭学習の充実を通して、生徒個々に応じた進路実現をめざす。	① 生徒による授業評価や教職員相互の授業参観をもとにして、学力向上につなげる授業を充実させる。	教務	昨年度後期、生徒アンケートの「学習内容について力がついたと実感している」の項目に対し「はい」と回答した生徒の割合は40.5%、「おおよそ」と回答した生徒の割合は44.9%であった。	「満足度指標」 授業に工夫を凝らし、生徒の学力を高め、自分自身でも「学力がついてきている」と実感できる生徒の割合を増やす。	生徒アンケートの「私は授業を通じて学力(知識・技能、思考力・判断力・表現力)がついてきている」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答える生徒の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C,D の場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	② 適切な学習課題を課すことや、生徒との面談を通して、家庭学習の習慣化を図り、授業の予習・復習にしっかりと取り組ませる。	教務 学年	昨年度後期、生徒アンケートの「毎日、授業(国数英3教科)の予習・復習をしていますか」という質問に「はい」と回答した生徒の割合は40.6%、「おおよそ」と回答した生徒は44.0%であった。	「成果指標」 家庭学習が習慣化し、予習・復習にしっかりと取り組んでいる生徒の割合を増やす。	生徒アンケートの「私は予習や復習をして授業に臨んでいる(国数英3教科)」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答える生徒の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C,D の場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	③ ICT 機器等の視聴覚教材の使用や、生徒と教員間・生徒間の対話の重視に加え、それに基づいて思考を深める時間を授業中に確保する。	教務	ICT機器を活用している教員は増加傾向にある。「主体的・対話的で深い学び」を目標に、講義調の授業は減少し、双方向の授業が増加しているが、「深い学び」にまで至っているかは検証の必要がある。	「努力指標」 授業において、導入・展開・まとめを意識し、授業の中心に「思考を深める時間」を確保する教員が増加する。	教員アンケートの「生徒が授業中に主体的に考えるようにし、思考を深める時間を確保している」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答える教員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C,D の場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	④ 国公立大学一般入試に対応できる記述学力の向上を図り、難関大学や金沢大学および国公立大学への進路実現率を高める。	進路指導 3年	昨年度、現役生の国公立大学の合格者数は96名、内難関大学に1名、金沢大学には14名が合格した。2次試験に通用する記述力を身に付けさせる取り組みを継続する必要がある。	「成果指標」 難関大学、金沢大学及び国公立大学の現役合格者数が増加する。	国公立大学の現役合格者数 内難関大・金大 A: 100人以上 A: 20人以上 B: 90人以上 B: 15人以上 C: 80人以上 C: 10人以上 D: 80人未満 D: 10人未満	C,D の場合は、改善策を検討する。	

平成31年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No.2)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(2) 学業と部活動の両立をめざすとともに、急速に変化する社会に対応し、失敗からも学ぶことのできる、たくましく、しなやかな生徒の育成に努める。	① 文武両道を基本に、各々が年度当初に立てた目標を達成するよう努力する。	特活指導	平成30年度県総体の成績は総合26位であった。ボート部と少林寺拳法部が全国総体に、吹奏楽部は全国大会に出場した。 本年度は、各々が立てた目標をもとに評価することとした。	「努力指標」 各々が効率的かつ効果的な練習を工夫し、成果をあげることができる。	教員アンケートの「年度当初に立てた目標が達成できた」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答えた部顧問の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	C,Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	② 重点目標にあるように「失敗からも学ぶことができるよう」自主性を重んじる。部活動や学校行事における計画段階で、生徒の意見も取り入れる。	特活指導	昨年度、生徒アンケートの「本校生徒の一員として、生徒会活動・各種委員会における役割をきちんと果たしている」という項目に対して「はい」「おおよそ」と回答した生徒は前期62.4%、後期67.2%であった。	「満足度指標」 本校の一員として、部活動や学校行事に積極的に取り組む生徒の割合を増やす。	生徒アンケートの「部活動や学校行事に積極的に取り組んでいる」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答えた生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	C,Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	③ けじめをつけるためにも授業の最初と最後に挨拶を行うことを徹底する。また、教員からも積極的に声かけすることで、生徒が自発的に挨拶するよう指導する。	生徒指導	昨年度、「自発的に大きな声で挨拶をしていますか」という質問に対し、「はい」と答えた生徒の割合は前期41.5%、後期45.6%であった。	「成果指標」 指導の結果、大きな声で挨拶をしたり、職員室等への入退室のマナーがきちんとできる生徒の割合を増やす。	生徒アンケートの「あなたは校舎内で自発的に挨拶をしていますか」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答えた生徒の割合が A：60%以上 B：50%以上 C：40%以上 D：40%未満	C,Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施

平成31年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No.3)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(3) 地域に根ざした活動や情報の発信を進めるとともに、学校業務の効率化を図り、保護者や地域に信頼され、必要とされる学校づくりを推進する。	① いじめ防止基本方針に基づき、全職員の共通理解の下、いじめの未然防止や対応に取り組んでいる。	生徒指導	軽微な事例だと思われることでも、担任・学年団・生徒指導課・相談室・管理職等が連携を取り、対応している。改めて、教員の意識をアンケートで検証する。	「努力指標」 いじめの未然防止を基本に、早期発見・早期対応を心掛けている教員の割合が増加する。	教員アンケートの「いじめの未然防止を基本に、早期発見・早期対応を心掛けている」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答えた教員の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	C,Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施
	② 地域でのボランティア活動を各学期に1回以上計画し、学校教育に対する地域の理解を得る。	総務 特活指導	部活動の一環あるいは個別的にボランティア活動に取り組む生徒は増えてきており、昨年度、1回以上参加した生徒の割合は58.9%であった。部活動を中心として、積極的に参加する生徒を学校全体で育てたい。	「努力指標」 ボランティア活動に参加する生徒の割合を増やし、地域社会の一員であるという意識を高める。	ボランティア活動に参加したことがあると答えた生徒の割合 A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	C,Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施
	③ ホームページで本校の特色や教育活動の様子をタイムリーに発信するとともに、情報の速やかな更新とわかりやすいページ構成に努める。また、メール配信では必要な情報を遅延なく提供する。	総務 企画情報	種々の方法で情報の提供に努め、ホームページの更新やメール配信を随時行った結果、保護者の学校に対する理解も深まりつつある。昨年度のアンケートでは満足している保護者の割合は89%であったが、さらに満足度を上げる必要がある。	「満足度指標」 学校の様々な情報発信に対して満足する保護者が増加する。	学校の情報発信に対して、満足していると答えた保護者の割合 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	C,Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施
	④ 教員が月1回の定時退校日や部活動における平日1日と土曜日又は日曜日1日以上以上の休養日を遵守する。	教頭	昨年度、本校教職員の時間外勤務時間の平均(時間/月)は44.5時間であった。また、時間外勤務時間が80～100時間の教職員は月平均5.5人、100時間超は1.3人であった。 また、後期教員アンケートで「教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保しつつ、これまでの働き方を見直すことができたと感じる教職員の割合は51.1%であった。	「満足度指標」 限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保しつつ、これまでの働き方を見直す教職員が増加し、毎月の時間外勤務時間が80時間を超える教員が減少する。	教員アンケートの「教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保しつつ、これまでの働き方を見直すことができたと感じる」の項目に対し「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答えた教職員の割合が A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	C,Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施